

# ペリー来航から、 岩倉使節団の横浜出帆まで

明治期に始まる産業振興と文明開化、  
日本社会の近代化に多大な影響を及ぼした岩倉使節団。

産業史的観点から、いま一度この偉業を見つめ直し、

閉塞感ただよう現代と、将来を見据えた希望の灯を見出したい。

岩倉使節団の足跡を辿りながら、6回の連載企画でお届けします。

文 泉三郎（ノンフィクション作家）

## ペリー艦隊の衝撃と開国維新

1853年7月8日（嘉永6年6月3日）、黒船四隻が江戸湾に出現した。それは高性能の大砲数十門を備え、うち二隻は蒸気機関によって自在に走り回る最新の見たこともない黒い怪物だった。当時、日本にも大砲はあつたが大半の射程距離は1000メートルに達せず、黒船の2000〜3500メートルにはとても及ばなかった。江戸湾の奥まで進めば、江戸城を簡単に破壊できるのだ。江戸の民が大騒ぎをす

るのは当たり前である、真偽さまざまな情報が伝わり、出来たのがあの狂歌である。

「泰平の眠りを覚ます上喜撰、たつた四杯で夜も寝むれず」

上喜撰は名茶の銘柄であり、蒸気船に掛けたのだ。江戸湾に乗り入れて来た黒船は最新の兵器であり、モクモクと黒煙を吐き出し重砲を羅列して走る姿は、得体の知れぬ恐怖を見る人に与えた巨大な魔物であった。

当時、幕政を担っていた最高責任者は老中首座の阿部正弘であった。幕閣の中樞はすでにオ



山口蓬春の作品「岩倉大使欧米派遣」。1871年、横浜港を出発する使節団一行。  
小船には和装の岩倉具視と両脇に大久保利通と木戸孝允が控える。聖徳記念絵画館所蔵



阿部正弘の肖像。福山誠之館同窓会所蔵

ランダ商館長からの風説書でアヘン戦争によって中国が香港を割譲されてしまったことを知らされており、早晩欧米諸国から黒船が来て開国要求をつきつけられることを予測していた。しかし、眼前に出現してみるとその衝撃は想像に余りあるものがあつた。

先覚者佐久間象山は、この報に接すると直ちに浦賀に直行した。最先端技術に詳しい佐久間は持参の望遠鏡で黒船を凝視した。四隻の艦隊はみな砲門を開き臨戦態勢にあることを確認した。弟子であった吉田松陰も浦賀に急行し、その黒船の威容を目の当たりにするのだ。

阿部は歴史的国難来たるとの認識から、それまでの慣例を破って全国の大名や旗本、公家や識者にも意見を諮問した。当時のご意見番、徳川斉昭をはじめ開明派の有力大名たち、島津斉

彬、鍋島直正、松平春嶽、一橋慶喜はむろん、その部下たち、勝海舟や橋本左内、藤田東湖や江川太郎左衛門など、如何にして国を守るかの海防論が全国に沸き上がった。

世界情勢に通じているものは「開国やむなし」という意見だった。しかし、阿部は幕府始まつて以来の大事であり、天皇の勅許をうけることが必要と考えた。そこで老中堀田正睦が京都に上り朝廷にお伺いを立てた。が、孝明天皇は生来の西洋嫌いであり、公家たち特に岩倉具視らの強硬派は時期尚早であると猛烈に反対し、勅許は得られなかった。

そして国論は「攘夷か、開国か」に分かれ、テロを伴う争乱となって全国に波及した。その渦中、大老となった井伊直弼は一存で通商条約の締結に踏み切る。米国の総領事タウンゼント・ハリスの進言「グズグズしていると大英帝国がやって来てもっと不利な条約を結ばされるぞ」を恐れたからだ。井伊の決断は英断といえる。が、その独裁的な手法には反発が強く、危機感を覚えた井伊は猛烈な弾圧に転じ、水戸藩主をはじめ有力大名を閉門蟄居させ、攘夷派の志士吉田松陰や橋本左内ら多くの人材を処刑してしまった。いわゆる「安政の大獄」である。しかし、それは底知れぬ恨みを買ひ、周知のとおり、万延元年井伊は桜田門外で首をはねられるのだ。

こうした混乱の中、徳川慶喜が將軍となり、幕政の改革、倒幕勢力の懐柔鎮圧を図る。が、

長く泰平に馴れた幕藩体制ではこの歴史的大変  
化に対応できず、外様雄藩たる薩摩長州の同盟  
が成立して倒幕勢力が有力となり、ついに鳥羽  
伏見の戦になって天皇を中心とする統一国家の  
成立になっていくのだ。

## 遣米欧使節団、各種留学生、 新政府の誕生

開国に踏み切った幕府は米欧事情を知るべく  
種々の使節団を派遣した。その最初が1860  
年の米国への新見使節団であり、随伴した威臨  
丸には勝海舟や福沢諭吉が乗船していた。61年  
には竹内使節団が欧州の6か国（英・仏・オラ  
ンダ・ロシア・プロシヤ・ポルトガル）を訪れ  
る。そこには、松木弘安（寺島宗則）、福地源  
一郎や福沢諭吉も随行しており、その見聞が後の  
大きな力となっていく。

62年には上海へ調査団を派遣する。これは数  
次にわたるのだが、実務的な貿易や各種の調査  
が目的であり、薩摩の五代友厚や長州の高杉晋  
作、佐賀の中牟田倉之助らが参加、貿易のみな  
らず軍事や政治面でもいろいろと学ぶことが  
あった。

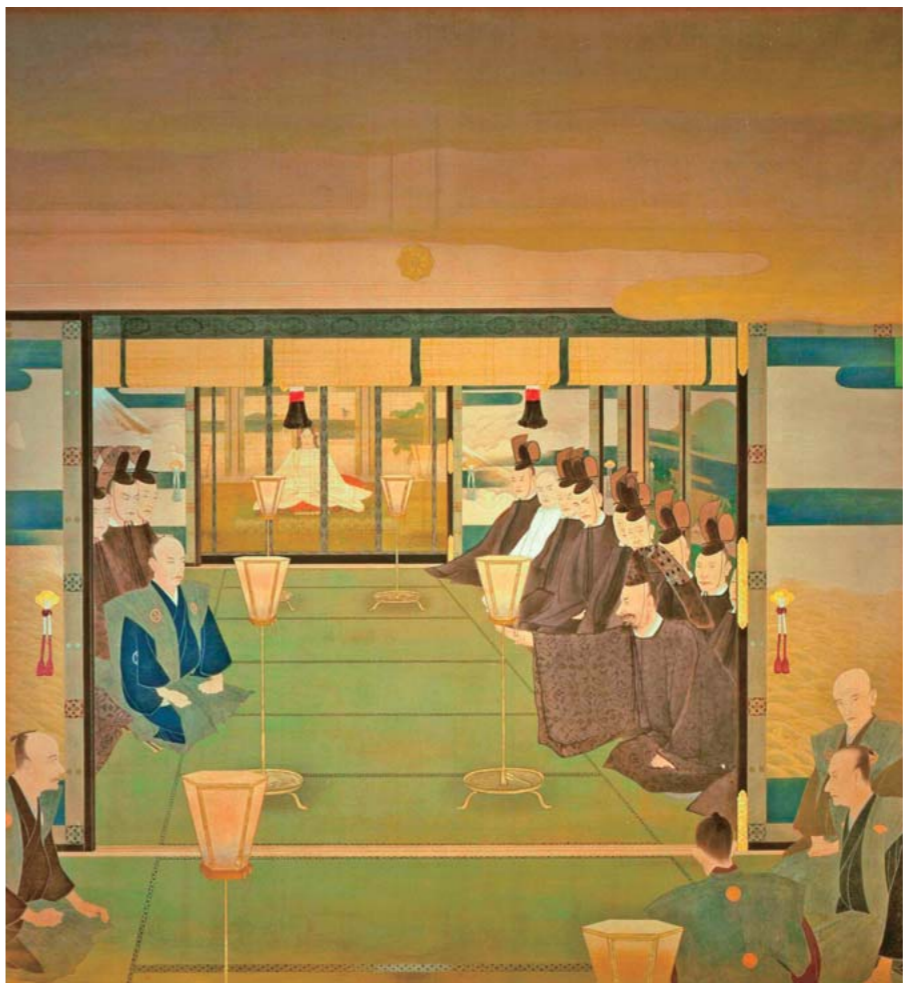
63年には池田使節団がフランスに派遣され  
る。これは横浜鎖港を談判する目的で失敗に帰  
するのだが、多くの人材が参加し見聞を広めた。  
田辺太一、矢野二郎、尺振八、塩田三郎、山内  
六三郎、益田孝、三宅復一などなど、後に各界  
の要人となる。それらが維新後、大きな  
人的資産となって生きてくるのだ。  
幕末に結ばされた条約は治外法権や関税自主  
権の喪失という不平等なものであった。それを  
改正し完全な「独立」を確保しなくては半植民  
地にされる恐れがあった。そのためには「富国  
強兵」を図るしかなく、統一国家をつくるしか  
道はなかった。幕末の見識ある人物の間でそれ  
は共通認識になっており、問題は幕府中心でい  
くか、天皇国家でいくかの選択だった。結局、  
錦の御旗を奉じた薩長中心の討幕軍が勝利して  
「王政復古」が宣言され天皇政府が樹立される  
ことになるのだ。

## 革命的な廃藩置県、 そして岩倉使節団の派遣

政府は「五箇条の御誓文」を發布し、太政官  
制度を確立して維新の首謀者らが政権中枢に座  
ることになる。公家から三条実美、岩倉具視が、  
各藩の実力者から西郷隆盛、大久保利通、木戸  
孝允、大隈重信、板垣退助らが参議に就任する。  
そして1871年8月（明治4年7月）には、  
実質維新ともいえるべき「廃藩置県」が断行され  
るのだ。それは300もあった藩を廃して県と  
し、旧大名の知事の首を中央が任命した知事に  
すげ替え、軍事と財政を中央政府がしっかり把  
握することを意味した。まさに革命的な改革で  
あり、これによって初めて実質的な統一国家が

で大いに活躍する。

67年には徳川昭武使節団が派遣される。これ  
はナポレオン三世がパリ万国博覧会に招待した  
もので、將軍慶喜は末弟の昭武を代理で派遣し  
たのだ。ここには渋沢栄一が後見役で随行して  
おり、その貴重な見聞と海外体験は後の巨人渋  
沢を生む礎をなしたといえる。



島田墨仙画「王政復古」には、奥に明治天皇、山内豊信（中央左）と岩倉具視（右）、大久保利通（右下背）が描かれている。聖徳記念絵画館所蔵

形成されることになったのである。

しかし、政府首脳は新しい国家をどのように  
形成していくか、具体的な青写真を描いていな  
かった。幕末から多くの人材が米欧に派遣され  
留学し、多くのことを学んできた。その代表が  
福沢諭吉であり『西洋事情』ほかの著作によつ  
て開化論を鼓吹した。しかし、新政府のトップ  
リーダーたちはまだ西洋を裏見していない。「百  
聞は一見に如かず」である、岩倉も木戸も大久  
保もこの際、是非西洋を見たいと思った。決死  
の覚悟で断行した「廃藩置県」が意外にもすん  
なり遂行されたこともあり、この機を逃さず敢  
然として大使節団を派遣することになるのだ。

全権大使は右大臣外務卿の岩倉具視、副使は  
参議の木戸孝允、大蔵卿の大久保利通、この三  
人はまさに維新革命の立役者だった。そこに若  
手の実務官僚で工部大輔の伊藤博文と外務省の  
少輔の山口尚芳も副使となる。そして随行の書  
記官には外国語や海外事情にもくわしい旧幕臣  
が多く採用された。書記官長役には田辺太一、  
一等書記官には福地源一郎、何礼之、塩田三郎、  
二等書記官以下には林董、川路太郎などであ  
る。そして各省からは調査官を派遣、東久世通  
禧、田中光顕、肥田為良、佐々木高行、山田顕  
義、田中不二麿など、実務経験もある実力者が  
選ばれ、そこに随員がついた。

また、官費、私費併せた留学生やお付きを60  
人も随行させた。その中には団琢磨や金子堅太  
郎、中江兆民や平田東助、さらには津田梅子ら

さらに幕府は留学生を派遣している。62年に

はオランダへ、榎本武揚、林洞海、赤松則良、  
西周、津田真道らを、66年には英国へ、川路太  
郎、外山正一、中村敬宇、林董三郎、箕作大麓  
らを送った。また、藩からも63年には長州が井  
上馨、伊藤博文、山尾庸三、井上勝らを、66年  
には薩摩が森有礼、鮫島尚信、町田久成、畠山

5人の少女も含まれていた。

このように、この大使節団は開国以来の西洋  
探索団のまさに集大成のようなものであった。  
大政大臣三条実美は「送別の宴」を設け、次  
のような送辞を読みあげた。

今や大政維新、海外各国ト並立ヲ図ル時ニカ  
リ  
使命ヲ絶域萬里ニ奉ス  
外交内治前途ノ大業其成其否、實ニ此拳ニ在リ  
豈大任ニアラスヤ  
大使天然ノ英資ヲ抱キ中興ノ元勳タリ  
所属諸卿皆国家ノ柱石、而所率ノ官員亦  
是一時ノ俊秀  
各欽旨ヲ奉シ、同心協力以テ其職ヲ尽ス、  
我其必ス奏功ノ遠カラサルヲ知ル  
行ケヤ海ニ火輪ヲ転シ、陸ニ汽車ヲ輾ラシ  
萬里馳驅、英名ヲ四方ニ宣揚シ、恙ナキ帰朝ヲ  
祈ル

格調高き名文である。旅立つ者も見送る者も  
意気さかん、使命感に溢れて武者震いするよう  
な門出であった。

泉三郎（いずみさぶろう）  
「米欧回覧の会」理事長。1976年から岩倉使節団の  
足跡をフォローし、約8年で主なルートを辿り終える。主な  
著書に、『岩倉使節団の群像 日本近代化のバイオリア』ミ  
ネルヴァ書房 共著、編、『岩倉使節団という冒険（文春新  
書）』、『岩倉使節団―誇り高き男たちの物語（祥伝社）』、  
『米欧回覧百二十年の旅』上下二巻（図書出版社）ほか。